

健康文化

「医療情報学再考」

池田 充

医療情報学と聞いて人はなにを思い浮かべるのであろうか。どこか聞いたことのある始まりで恐縮であるが、かつての小生はこのことを何かことあるごとにいつも自問自答していたような気がする。この種の問いに十人十色のことを思い浮かべるのは世の常であるが、医療情報学において小生が問題としたいのは、医療情報学に関わる人達において医療情報学の（この言葉自体が曖昧ではあるが）イデオロギと表現すべきものが一向に確立しないことである。医学・医療における情報科学を医療情報学とすることには異論を唱える人はまずいないが、その一歩先が見えてこないのである。具体的になにをする学問であるのかという点になるとだいぶ曖昧となってしまうのが現状であろう。医療情報学が学際分野から一つの学問分野を形成したとするのであればこの現状をどう考えればよいのであろうか。

かなり前の話になるが、当時の国立大学医学部附属病院医療情報部のある教授が、「A大学の附属病院医療情報部にはAという医療情報学があり、B大学の附属病院医療情報部にはBという医療情報学がある。これが医療情報学なのですよ。これでいいのですよ。」とおっしゃったことを記憶している。この言葉は、当時の小生の感じていたある種のフラストレーションを見事に表現してくれたもので同先生には改めて敬意を感じたものであった。しかしながら、それと同時にこれでいいのかという思いも強くした。小生の恩師の一人である佐久間貞行先生から、これと同じ意味のことをそれよりも前に別な観点から鋭くかつ批判的にご指摘されていたことも思い出して改めて感心もしたりした。

個人的な話で大変恐縮であるが、小生は統計学が好きなので医療統計学とそれに関連する分野は医療情報学の大切な一分野と考えていた。この考え方に同調する医療情報学に関わる人達は少なからずいて、そういう人達の何人かと親しくお付き合いもさせていただいた。しかしながら、そうではないとする医療情報学に関わる人達はもっとたくさんいるのである。もっと具体的な例を挙げれば、「根拠に基づく医療

(Evidence-Based Medicine)」は医療情報学にとっても極めて重要なキーワードと小

生は考えるのだが、このキーワードが医療界を席卷しつつあった頃は医療情報学に関わる人達の中にはこのことに全く無関心な人達が少なからず存在したのである。逆に、小生が医療情報学にはあまりふさわしくないと考える分野について、多くの医療情報学に関わる人達が重要であると考えているということが予想される。このような状況を考えると、医療情報学に関わる人達の知識の多様性は、いまだに学際分野の状態の段階であると言えるのではないだろうか。もちろん学問の多様性は医療情報学に限ったことではないが、一つの学問分野の専門家集団が形成されるためにはある一定以上の知識の共有は不可欠である。医療情報学を一つの学問分野とするのであれば、共通の知識に関する具体像があってしかるべきであるが、少なくとも小生にはこれが見えてこないのである。このことは、学会活動に極めて重大な支障を与えるのではないだろうか。科学的知見が学問として成熟していくためには、ある程度の専門家集団によって共通に認められることが必要である。医療情報学に関係する学会がこのような意味での科学的知見の形成にどのくらい寄与してきたと言えるか、(学会が創立されて日が浅いことを考慮にいれても)小生の独断と偏見でははなはだ疑問であると言わざるを得ない。

医療情報学を一つの学問分野とすれば、医療情報学の専門家と称すべき人達がいるはずである。しかしながら、医療情報学にとって大変不幸なことであるが、小生の体験に基づく実感ではどのような人達を医療情報学の専門家と言うべきかが一般にはどうもはっきりしないようである。本文で、医療情報学の専門家という言葉を取って使用していないのはこのためである。今日、コンピュータやデジタル機器が好きな人達はどの分野にも少なからずいるものである。医療分野に携わる人達も例外ではなく、コンピュータが趣味であるような方はたくさんいる。このような人達と医療情報学の専門家と言うべき者との境界線は、本来は将棋や囲碁のアマとプロの区別に近いものであってしかるべきと思うのだが、明瞭とは言えないのが現実なのである。このことは、小生にとっては口惜しく大変残念なことである。小生が若き日に尊敬する政治学者の講義で聞いた一文によれば、自己の認識は他者が自己をどのように見ているかを認識することによって行われるのである。このような状況では、医療情報学の専門家というアイデンティティは確立しようがない。

一方、広義の意味での情報科学は、その進歩は驚異的でさえあり、社会に対して非常に強い影響を与え続けている。情報ネットワークが社会的インフラの一つと認識される(このことについては最近見直すべきであるという議論があるようである)よう

になって久しいし、現在の情報の多くの部分がデジタル技術によって形成される空間内にあるのである。このような状況は、医療分野においても全く同様である。広義の意味での病院情報システムと称すべきシステムは、今日の日本においてはたいていの病院で稼働している。電子カルテは、もはやめずらしいものではなくなった。多くの放射線科医が液晶モニタを用いて診断し、レポートシステムを用いて読影レポートの作成を行っている。少なからず関わった者の一人として敢えて申し上げれば、今日の日本における病院情報システムの普及には医療情報学に関わる人達が多大な貢献を果たしてきた。今日の日本の病院における情報システムの姿は、1990年前後に医療情報学に関わった人達が思い描いたものに極めて近いものである。だからこそ、かつての医療情報学には最先端の花形科学であるという装いがあったのである。

ところが、最近の20年間におけるこのような目を見張る情報科学の進歩における医療情報学独自の成果となると話は別である。自戒を込めて申し上げれば、この20年間における情報科学の進歩に、日本における医療情報学は目に見えるような意味で寄与することはほとんどできなかつたと言ふべきであろう。さらに申し上げれば、情報科学がこれほど進歩してしまうと医療情報学の独自性をどこに見いだすべきであるのかは難しい問題となってしまったようである。今日の医療情報学に関係する人達にとって、俗に言う研究のネタ探しはきわめて難しい状況にあるのではないだろうか。

このように、今日日本の多くの大学医学部に医療情報学に関係する部門や講座があるにも関わらず、現状での日本における医療情報学は一つの学問分野とするには様々な問題点があると小生には思われる。数年前、小生は、ある医療情報学に関わっている人が、日本の医療情報学はその歴史的役割を終えたような旨のことをおっしゃったことを記憶している。当時の小生も同感ではあった。さらにこの数年間の出来事を考えると、日本の医療情報学が一つの転換点を迎えたことだけは確かである。しかしながら、日本における諸状況は医療情報学という学問の存在を依然として必要としているようである。少なくとも、日本の大学病院における病院情報システムを支えていくためには、医療情報学は存在する必要があるようである。ここにこそ、日本における医療情報学の問題点が集約されていると小生は申し上げたい。そして、かつて医療情報学に関わった者の一人として、日本の医療情報学が真の一つの学問分野に成熟するように力強く再生することを切に祈っている。

(名古屋大学医学部教授・保健学科放射線技術科学専攻)